

方法概念の分析

第一部

戸 坂 潤

空疎な興奮でもなく、平板な執務でもなくして、生活は一つの計畫ある營みである。一定の出發と一定の目的とを有つ歩みで常にあるであらう。この意味に於て、歩みは途を逐ふて運ばれなければならない。一切の生活に於けるこの特色は、恰も方法といふ言葉によつて代表される。吾々のどのやうな勞作に於ても、方法は根本的な意味を有つ。獨り學問の研究に於てばかりではなく、藝術的感觸を完成するにも、人間の性格を育て上げるにも、又その他どのやうな場合にも、根柢に方法が働いてゐないとは考へられない。中にも學問の研究にとつては、最も方法が重大でなければならぬ。學問を眞に自己のものとしようとする時、云ひ換えれば實際に自らその學問を追究し自己にとつてその學問がもつ必然性を檢證しようとする時、方法が吾々にとつて問題とならずには措かない。方法がそれ自身に依つて——例へば方法論

といふやうな話題に促されては、なく——問題となるのは恐らく、その學問の前途を祝福して野心ある計畫を持たうと欲する時とか、それでなければ、その學問の現狀に疑ひを懷いて去就を決し兼ねるやうな場合であらう。何となれば、吾々がある學問の特徴を見抜き見極めるのに役立つのは、雑多な末梢的博識ではなくして、正に方法を中心とした中樞的把握である外はないが、かくて把握された方法的理解は始めて、その學問が持つ第一義に優れた特色——性格——を吾々に示すことが出来るからである。又吾々はこの性格を捉へてこそその學問を批判することも出来るのである。任意の手當り次第の、又は他からそのまゝ受けとつた、一つの特色を持ち出し、又は或る特色自身にとつては偶然であるやうな視角からその特色を取り扱ふことは、少しも批判の名に値ひすることではない。たとへ論構がそれ程緻密であつても、見當を逸してゐるならば、そこに取り扱はれた問題は批判されたことにはならない。方法的理解のみが學問の性格を明かにしその批判を可能ならしめる。

方法的理解——方法を中心とする中樞的把握——と云つたが、併し方法とは何であ

るか。無論私は學問の(乃至學問研究の)方法に就いて答へる。そして夫と反對——反對の意味は後に説明される——なものを通じて夫を分析するのが適はしい。方法に反對なるものは對象である。*對象は方法の目的であり、方法は對象の出發點である。と云つてよい。吾々が方法によつて通達するもの、それが對象である。處で或る特定の對象に對して或る特定の方法があるのが至當であると思はれる。もし任意の對象に對して任意の方法が適はしいとすれば、特にこの學問の方法といふやうなことを吾々が問題としてそれに關心を有つ理由がない筈である。處が方法が吾々にとつて抑々問題となるのは、之がこの學問又はかの學問の夫々の性格を云ひ表すからであつた。故に特定の對象に對して特定の方法が對立する。今假に、特定の方法と之に對する特定の對象といふ二つの既知の概念を用ゐて、さし當り最も形式的な出發をとるとすれば、論理的に必然な撰言として次の四つの場合が現はれて來る。(一)對象が方法を決定するか(二)方法が對象を決定するか(三)それとも對象でも方法でもない第三者が兩者を同時に決定するか(四)それとも又方法と對象との相互決定であるか。何となれば、特定なものどそれに對立する特定なものとの間の關係を、最も一般的な言葉をかきりて、決定と呼んでよいから。恐らく第一の場合、素朴的乃

至獨斷的、或ひは或る意味に於ける實在論的立場と呼ばれるものを云ひ表はし、第二の場合には「コペルニクスの轉回」を経た批判的乃至或る意味に於ける觀念論的立場と云はれるものを代表するであらう。けれどもこの二つの是非は或る手懸りを得た後に始めて決定されるべきであつて、始めから之を決定して出發することは吾々にとつて不利である。何となれば方法と對象との何れか、特に優先權を有つ事は形式的出發としては許せないから。第三の場合は方法と對象とへ同じ權利を與へる點に於て形式的に整つてゐるには違ひない、けれどもその第三者とは何か。吾々は今方法と對象との二つの概念しか知らない。第三者は *Etwas* の外何とも云ふことは出来ない。處がそのやうな「或るもの」から出發することは常に不可能である。何となれば或るものとは、何物の手懸りにもなることが出来ないといふ意味に於て、一つの逃避的概念であるからである。たとひ方法・對象の綜合がそれであると云つても、その場合のやうに單に綜合するための綜合こそは、折衷の概念がそれを説明してゐるやうに、一つの代表的な逃避的概念に外ならないであらう。かくして殘るものは第四の場合——相互決定——だけである。第一にそれが形式上の整備を有つてゐることは明らかである。次にそれは出發の手懸りとなることが出来るに違ひな

い。相互決定の概念が決して逃避的概念ではなくして生産的な概念であることを、私は次第に明らかにして行けるであらうから。

方法^{*}に對するものとして人々は、主題とか體系とか資料とかを擧げるかも知れない。おのづから明らかとなる理由によつて私は之からは出發しない。

相互決定の分析に先立つて一つの注意を忘れてはならない。人々は茲に直ぐさま交互作用を憶ひ起こすことであらう。方法と對象とは交々互ひに決定するのであつたし、そしてこの決定とは無論靜止的關係ではあり得ないが、今もしこの決定をば決定といふ作用を作用する——wirkliches Wirken——ことであると云ふならば、相互決定の關係は一應は交互作用と呼ばれてもよいやうである。けれどもそのやうな意味に於て交互作用を語るのであるならば、それは少しも方法對象の相互決定を分析するものではなくして、却つて一つのより蕪雜な概念——作用といふ——を用ゐて同語反覆するに過ぎない。處でもし同語反覆以上のより積極的な内容を之に與へようとするならば、こんどはこの概念の使用の場合をとり違へてゐることに氣附かなければならないであらう。といふのは、その積極的内容ある交互作用とはカントに於てさうあるやうに、一つの範疇に外ならないであらう。といふ意味は、對象と對象

どの「關係」を構成する概念で夫はあるであらう。^{*}處が吾々が求めてゐる關係は對象と對象との夫れではなくして對象と方法との夫れであつた。この關係にこの範疇を適用することはカントに於ても許されないことである。いふならばこの關係は範疇を越え範疇に先立つのでなければならぬ。^{*}兩者の相互決定の關係は既成の一範疇に包攝されて理解されるやうな部分的な事情ではないのであつて、出来るならば一切の範疇をそこに於て統一的に理解せしめるやうな根本的な關係にぞくさねばならぬ。^{**}それであるから今は交互作用——又は *Gemeinschaft*——といふ概念とは獨立に、この相互決定は分析されて行かなければならぬ。

*カントの言葉を借りるならば *Handelndes* と *Leidendes* との交互作用である。ロツツエの根本概念である處の交互作用も亦物と物との間の夫れである。Lotze, *Metaphysik* Kap. 6 參照。

**カントの物自體が感性を感觸する處の原因であると云ふ時、因果の範疇に就いて今と同じことが云はれたことを思ひ起こす。

**例へばフイヒテの自我の體系をどらう。フイヒテに於ても交互作用は自我から演繹された一つの範疇に過ぎない。

向に、特定の對象に特定の方法が對立すると云つた。その時、特定といふ言葉はただ任意を否定する目的にのみ用ゐられた。今や之に次のことを附け加へなければならぬ。第一にそれは唯一を意味するのではない。唯一の對象と唯一の方法とが必ず一對一の關係にあることを必要とするといふのではない。唯一でなくして幾個でも好いがたゞ任意の數であつてはならないといふのである。又唯一の甲ではなくして乙でも丙でも好いがたゞ任意のものであつてはならないといふまである。或る一定された範圍の内に於て對應關係が成り立たねばならぬことをそれは云ひ現はしてゐたのである。その範圍が實際どのやうなものであるかは問題としないが、少くともこの範圍は任意でも唯一でもない處の一定——特定——でなければならぬ。それ故第二に、特定とは一定不變を意味してはならない。對象も方法も決してどのやうな意味でも不變と考へられるのであつてはならない。却つて常に運動し得る(變化し得る)可能性を有つてゐると考へられなければならない。たゞその變化—運動が任意の變動であつてはならないと云ふまでである。かゝる運動

は浮動ではなくして意味ある運動である。自然界の運動に於ても意味ある運動は名前を與へられてゐるやうに——圓運動とかジグザグとか——この運動も亦——後に——名稱を有つことが出来るであらう。すでに何かの運動が可能であることが必要であつた。どのやうな運動が實際に存在してゐるのであるか。——私は論理的分析を出發の手懸りとして事實の分析に這入つて行くのが目的である。

對象と方法とは相互に決定する。その場合決定が何れから何時始まつたか、といふことは全く問題になることは出来ない——それは相互の概念を破壊する。さうではなくして而も現に己に一方が他方を決定し、かくして決定された他方が更に又一方を決定してゐるのである。この過程には終りがない。茲に際限ない循環が存在してゐる。けれどもこの循環は無論かの「悪しき循環」であるのではなくして、實に根本的な循環である。何となれば之は思惟に於ける論理的循環ではなくして、相互決定といふ存在の可能性に於ける云はゞ存在論的循環に外ならないから。さて、このやうな何か存在論的なる循環は、方法と對象との間の一つの運動とも考へられるが、併しまだ直ぐには方法それ自身對象それ自身の持つ運動とは考へられないに違ひない。而も吾々が問ふてゐたのは後者の場合の運動であつた。この循環によつ

ては、對象自身方法自身はそのまゝ變化することなく、却つて常にその前の自己に還るものではないか、と尋ねられるかも知れない。論理的循環ならば確かにさうである。吾々が或る假定から結論し、そしてその結論からその假定を證明する時、それを幾回繰り返しても、假定は依然として前の假定であり、結論は依然として前の結論である。もしさうでなければ、もはやそこにあるものは循環ではなくして寧ろ形式論理的矛盾でなければならぬのである。處が對象と方法との循環——相互決定は今やこの言葉によつて置き替へられる——は論理的循環ではなくして相互決定といふ何か存在論的なる循環であつた。この循環によつて對象も方法も變化しない筈であるとは云はれない。そして實際にそれは變化する。自然科学の方法にとつてその對象は自然であるであらう。自然は自然科学的方法によつて觀察され記述され又説明される。今まで明るみから匿されてゐた自然は次第に明るみの前へ持ち出される。暗くして恐らく深々と見えた對象は次第に覆ひを取り去られ、照らされ、透明にされ、個有の色彩を與へられる。明らかに對象は變化する。暗いものからその反對の明るいものへ運動する。又方法は始め自然を單に觀察するが、やがて之を記述し、次に之を説明しようとして企てるであらう。之は方法の變化である。この二

つの變化は運動を個々獨立には常々吾々は經驗してゐるであらう。併し私が今語らうとしてゐるのは、そのやうな個々獨立の二つの經驗に就いては、はなくして、正に兩者の相互決定に就いてはあつた。處がこのやうな二列の運動をしてそれぞれの運動であらしめるものこそ正に向の何か存在論的な循環でなければならぬ。何故ならば、對象も方法もそれ自身の力によつて運動するのではない——兩者は絶對者や一者やの概念ではあり得なかつた。さうではなくして却つて常に他から決定される性質を持ち、相互に他から決定されることによつて始めて兩者は運動することが出来るのであつた。それ故兩者の運動は兩者の間の循環によつて始めて必然性を與へられる。

それであるから今や明らかである。對象方法の相互決定關係は、兩者の何か存在論的循環に基く處の兩者の夫々の運動をば、その第一の規定とする。求められる相互決定はこのやうな構造——何か存在論的な——を有つ。(出發に選ばれた相互決定は單に形式論理的構造に過ぎなかつた。)*

*存在論的とは何を意味するかを後に正確に決定しよう。それは少くとも從來の形而上學の本體論と直接の關係があるのでもなく、又近くは本質論とも云ふ

べきフツサールの *Ontologie* と關係するのでもない事を注意して置けば足りる。

この運動が、直ちに人々の思ひ到るであらう處の運動の諸概念によつては、必ずしも正しく名稱づけられないことを指摘しよう。

例へば人々はこの場合發展、といふ言葉を好むであらう。尤も發展概念は往々にして進歩の概念を伴ふが、今之に觸れることは避ける。進歩は歴史にぞくし得る概念であつて、吾々の問題とする運動はまだ歴史にまで關係を及ぼさないであらうから。之に反して發展概念は確かに今の場合意味を有つことの出来る概念でありさうである。對象は發展し之に對して方法も發展する、といふ言葉は、對象方法の構造——但しそれは學問の歴史とは別である——を云ひ表はすに恰好であるやうに見えるさうである。併し發展といふ概念を行使して人々は何を企てゝゐるのであるか。包まれたものを擴げ、含まれてゐたものを表に出し、微細なものを擴大し、低度のもを高度にし、可能なものを現實にし、所謂含蓄より顯現への「移り行き」の結果を——移り行きの過程それ自身の持つ構造、をでなく正に過程の結果を——迹づけることを、

人々はこの概念によつて企てゝゝるのではないか。といふのは、移り行きが移り行くための必然的な構造として有つ性格を忘れて——それを知らないとか否定したとか云ふのではないが——、たゞ移り行つた足跡として夫が有つ性格だけを把握し、そして之を云ひ表はすのに發展といふ概念を利用するのではないか。發展といふ言葉で、もはや既に、何か々解決出來たかの如くに。尤ももしさうであるとしても之は發展概念自身の困難ではなくして、その概念の使用法の缺點であるかも知れない。併し私はこの概念が何故このやうに使用され易いかを必然的に理解出來るであらう。發展とは元來次第にとか順序に従つてとか段々にとか、いふ漸次的概念の一つである。それ故常にさうする必要がある通り、この概念をその構成の動機から理解するならば、その發展が如何なる構造を持たうともそれは抜きにして、ともかく漸次といふ形態に當て倏つた發展として、この概念が理解されることは、自然である。過程を抜きにして過程の結果だけをとり出し勝ちなこの概念の形式性は、やがて獨特な一種の發展概念を生むであらう。次第に、おのづから、困難なく、幸福に、そしてこの意味に於て自由に、みづから、獨立に、發展するかのやうに、發展は往々にして分出説的、演繹的、概念として利用され慣される傾きを有つ。さて吾々の運動は他からの決定

による運動であつた。この運動のこの性格を理解するに、このやうに單調にして一元的な發展概念の或るものが如何に不適當であるかを説明する必要はないであらう。それは要するに言葉の問題ではないか、或る人々はさう云ふであらう。否常に所謂言葉の問題は單なる言葉の問題ではあり得ない。ものゝ性格を如何に理解するかの問題である。言葉はその一つの症状に外ならない。もし吾々の問ふてゐる運動をば、今指摘したやうな意味での發展概念によつて片づけようとするならば、それはこの運動の優れたる性格を中庸化することの外の何ものでもないであらう。

更に不利な運動概念は前後相承 *Nacheinander* に歸着する諸概念である。例へば意識、概念は多く之に歸着するのが常である。意識は一つの流れに、波紋に、圓錐に、譬喩されたであらう。無論このやうな譬喩は意識を説明するには適切であるであらう。けれども問題はかく譬喩されるやうなこの概念を今の場合、即ち相互決定に基く運動の場合、にまでも及ぼして好いか好くないかである。尤も意識はそれを單に前後相承と呼ぶだけでは云ひ足りるものではないと云はれるかも知れない。けれども例へば之を時間的持續として性格づけるならば、そのやうな時間的持續は正に前後相承の概念である。それはたかく、創造しつゝある處の獨存的概念であつて、他か、

らの決定を媒介とする今の運動を之によつて理解することは、無論望みないことである。それであるから前後相承の概念——その代表的なものは或る意識概念である——によつて今の運動を説明しようとするれば、茲にも亦性格の中庸化が指摘されずにはゐないであらう。

さて以上二つの運動概念、發展概念の或るものと前後相承の概念は現象が一般に持つと考へられる根本的運動の代表的な二つの概念規定であるであらう。問はれつゝある運動——これも亦恐らく根本的運動にぞくすであらう——はこの二つのものから警戒される必要があつた。

この運動が他から區別されねばならない根本的な特徴は何處にあるか。私は最初、方法に對して對象を對立せしめた。かくして對象方法の關係が従つてその内に於ける運動が問題として提出されて來たのであつた。併し何故に方法に對して特に對象が撰び出されたのであつたか。對象は方法の反對であつたが故に。對象と方法との關係は單に相異なるものゝ對立と云ふだけではなくして、相反對するものゝ

對立であつたのでなければならぬ。それであればこそ特定の對象に特定の方法が對立すると考へられる必要があつた。兩者の間には初めから未知ではあるが或る特定の必然的な反對關係があつたのであり、この反對關係の上に立つたのであればこそ方法に對して對象が選ばれ、その關係も初めて問題となる手懸りを得たのである。けれども反對とは何か。まづこの反對關係が決して單に論理的なそれでないことは明らかである。といふ意味は、甲と甲に反對なる或るものが對立する際に、甲にも甲と反對なるものにも共通な一つの普遍者が是非ともなくてはならぬ、といふ、そのやうな形式論理的な統一關係が茲に働いてゐるのでないことは明らかである。假にもしさうとするならば、方法に對立するものは單に「方法に反對な或るもの」である筈であつて、決して對象が特にそれであるとは云はれないわけである。對象と方法との反對は、單に論理的反對といふばかりではなく、何か存在論的な反對であるとは云はなければならぬ。次に反對が形式論理的矛盾でないことは注意するまでもない。黒は白の反對であるが矛盾ではない。處で黒は白になる、黒は白に運動すると云ふことが出来る。之に反して例へば東が西になるとは考へられない。二つは何か概念の構造を異にしてゐる。黒白も東西も同じく相對的な反對概念と考

へられるかも知れないが、吾々は兩項間に運動の可能性を許すと許さないを區別する必要がある。前者は反對概念であり、後者は單に相對概念である。そしてこの運動こそ今の場合にとつて重大である。今私は兩項間の運動の可能性に基く處の反對のみを特に反對と呼ぶこととする。従つて例へば主觀と客觀との對立は反對とは呼ばれない。何となれば、主觀と客觀との區別によつて或物が説明されるためにこそ、兩者の對立は想定されたのであつて、兩者の相對的概念構成の動機を忘れない限り、兩者の間の運動は禁じられてゐるからである。兩者の對立關係は恰も前に述べた形式論理的統一のみによつて統一しつくされることも思はれる。主觀に對するものは、主觀に對する或るものであり、この或るものが客觀と命名されてゐるに過ぎないかも知れないのである。この關係に於て兩項間の運動は全く無意味であり、又たとひさうでないにしても、もし主觀が客觀に、客觀が主觀になり得るならば、もはや主客對立を想定しても何の效果も生じなくなるであらうやうな、即ちその概念が構成の動機を失つて破壊されるやうな、そのやうなものこそ主觀概念客觀概念である筈である。主客の對立を吾々は相關々係と呼ぶことは出来るであらう、併しそれは吾々の意味する反對ではない。かくて反對は對立でもなく、形式的反對でもなく、

矛盾でもなく、相對でもなく、相關でもない、夫は運動の可能性に基く一つの關係である。處が對象が方法となり、方法が對象となる、ことこそ望ましくなければならぬ。かくして方法の反對として對象が選ばれた。——さてさうすれば對象方法に於ける循環は正に反對なるものゝ間の夫れである。處があるものがそれと反對なものによつて決定されるとは何かこの循環は相互の決定の夫れであつた。私はそれを否定と呼ぼう。尤も否定は往々矛盾によつて惹き起こされるかのやうに、そして又矛盾のみが否定を惹き起こし得るかのやうに、云はれるであらう。けれども黒が白に變化する時、黒は白によつて否定されたであらう。黒がそれと反對なもの——それと矛盾するものではない——即ち白へ變化する運動を、吾々は黒の否定として理解してゐる。私の云ふのはこのやうに反對に根柢を持つ處の否定である。この反對は運動の可能性を有つた。そしてこの反對による決定と考へられたこの否定は、實際一つの——もはや可能性ではない處の——運動である。そこで、對象方法の循環は否定の循環運動でなければならなくなつて來た。従つて又この循環運動に基く處の、對象並びに方法の運動——變化はこの否定を媒介するのでなければ起こることが出來ぬことが明らかとなつた。事實、對象が單に對象であつて、方法へ向つて運動し

ないならば、對象は少しも對象らしいものとして顯はれて來ないであらう。それがそれ自身の實現に向つて運動し得るためには、對象は方法によつて構成されたものとして見出されなければならない。今まで對象と考へられたものをば、却つて吾々は方法として發見するのである。對象は方法に對して與へられたものから、方法によつて成立せしめられたものにまで運動する。今まで自然として性格づけられてゐた對象は、自然科學の内容として性格づけられるに到るであらう、そして自然科學の方法の下にぞくすることゝなる。對象は方法によつて否定される、そして却つてそのことによつて對象としての實現へ運動することが出来る。方法は常に對象を征服することによつて、益々その方法らしさを獲得するのである。方法は常に對象を否定する。(常に方法が對象を規定するかのやうに思ひなす觀念論の必然性は茲に横はる。)之に反して逆に又、方法は對象の内に見出されるのでなければならぬ。單に獨立なる方法はない、どのやうな方法も常に對象によつて口授されたものである外はない。之を忘れるならば、對象は全く勝手な方法によつて——例へば人間は人間としてでなく機械として——取り扱はれるといふ場合も出て來るであらう。方法の持つ性格は實は對象の持つ性格である。方法から見れば、對象は一つの試金

石であり批判者である。方法の獨立は常に對象によつて否定される。而もこのやうにして否定されればこそ、方法は方法としての實現へ運動し得るのである。對象は自己に個有な方法を命令することによつて益々その對象らしさを帯びて來るであらう。對象は常に方法を否定する。(常に對象が方法を規定するかのやうに思ひ做す實在論は茲にその必然性を享ける)。

このやうにして吾々の間ふ運動は否定を媒介する。方法と對象の夫々の運動は相互の循環的な否定に基き、この否定を媒介して始めて可能な運動であつた。處が吾々の否定といふ概念は又運動に根據を置く約束であつた。そして私は對象方法の關係に於て、このやうな運動とこのやうな否定との離すことの出來ぬこの規定を指摘した。處でこのやうな規定を持つ一つの根本的關係は辯證法と呼ばれることによつて最も適はしい名稱を與へられるであらう。辯證法といふ概念それ自身ですでに決して一定してはゐない。そればかりではなく辯證法が一種類に限ると考へられる理由もない。併しながら、今求められた規定は少くとも辯證法としか呼びやうのない處のものであると思ふ。之が辯證法であると云つて辯證法を説明しようとしてゐるのでは今はない。さうではなくして、ある求められた規定を説明する

のに辯證法の概念の或るものを用ゐようといふまでいある。辯證法は様々な問題提出の仕方にて問はれる。例へば之を論理の根本的な規定として、又形而上學的實在の規定として、吾々は問ふことが出来る。私は今之を存在論的規定として求める。對象方法の辯證法は存在論に於て始めてその地盤を發見するに違ひない。もしさうでなければ今まで述べられたことは一つの砂上の樓閣であつたかも知れない。

今試みに一つの存在論的理論を構成して見ることが必要となつた。

何が吾々にとつて直接であるか。近世の哲學は、主觀自我意識などを以て之に答へたであらう。直接性はこれ等諸概念の何れもが意味する處の或るものである。この或るものを人々は現象と呼んでゐる。直接者が何であるかは判らないとしても、それはとにかく直接性——現象であることを確かに語ることが出来る。それ故出發點として、この現象は何であるか、といふ形ちに於ける問題を提出することが最も普遍的結果を約束するであらう。現象論一般の必然性は茲にある。

現象は存在として現象する。例へば或る意味に於ける意識現象を以てこの現象を代表させることは困難である。何となれば自然現象とか歴史現象とか社會現象とかいふ或る現象は、それとは全く別な現象に還元され、引き直ほされるのでなければ、意識現象によつて代表されることは出来ないであらう。之に反して存在概念はそれ／＼の現象をして夫々の現象たらしめる丁度そのやうな概念である。妥當と存在との區別に頼る或る人々に對しては次のやうに説明しよう。吾々の存在概念は、妥當と存在との區別を何故その人達が理論として掲げるに到つたか、といふ丁度そのことを説明する筈の概念であると。存在を一般に主觀的であると客觀的であるとか呼ぶのは無意味である。元來吾々はどこからそのやうな主客の對立を持ち出して來たのであるか。それが直接であるからか。併し直接なものは主客對立を好む人々にとつて、寧ろ主客の統一・綜合・同一ではなかつたか。併し又主觀も客觀も直接でないならば、兩者の對立を豫想した上でその合致を語ることは、益々直接ではない筈である。之を尙直接と考へるためには、主客の對立従つてその合致といふ課題が、直接性にとつては全く見當違ひな出發であつたことに氣附くのでなければならぬ。之に氣附きながらなほ且主客合一の直接性を語るならば、吾々はその言

業を言葉通りに取る義務はない筈になる。そこで主客合一といふ黒き白は直接性の追求に容喙する権利を持ち合はせてゐなかつたことが顯はになつたであらう。まして主觀と客觀の一つ／＼は愈さうである。次に存在は存在する處の或るもの——實體本體——を意味するのではない。吾々は存在者が何であるかを(カントと共に)知ることは出來ない。たゞ存在者が如何に存在するかを問ひ得るだけである。存在の Was ではなくして存在の Wie が、存在の仕方が、存在である。現象の問題は存在の問題に外ならなかつたが、存在の問題とは存在する或るものに關する問題ではなくして存在することゝなつた。この意味に於ける存在概念の分析として、存在論一般は必然的である。^{***}

*現象といふ概念が、文字を同じくする他の諸概念とどう異なるかを、立ち入つて述べるまでもないであらう。ハイデッゲルは之を分類してゐる。M. Heidegger, Sein und Zeit S. 28 ff

**もし主客の對立から出發する方法を認識論と呼び、窮極的實在を求める方法を形而上學と云ふならば、存在論が認識論でも形而上學でもないことは、今や明らかである。

存在は夫々の性格を有つてゐる。存在の仕方とはこの性格であつた。種々ある存在の性格の内、最も根本的な性格は何か。といふ意味は、吾々が存在を問ふためには是非そこから出發せねばならず、従つて種々ある他の性格を之によつてのみ理解し得るやうな唯一の *par excellence* な存在の性格は何か。ハイデッゲルは Da の性格を有つ存在がそれであるといふ。私は今この言葉を借りて好いであらう。根本的存在は *Das Sein* である。吾々の始めの言葉を用ゐるならば、最も直接なものこそ之であつた。Da とは世界に於てあることを意味する。尤も世界といふ一定の領野が先づあつて何か、その世界の内に、在るといふことを、之は意味するのではない。世界はこの場合却つて Da 性格に基いて規定されるべき概念であつて、Da から獨立に單獨に理解されてはならない。Da とは世界に内在するもの、性格ではなくして世界そのもの、性格——世界性——であると云つて好い。世界といふことがすでに Da なのである。この Da としての世界は關心の世界である。環境といふ言葉がそれを要求するやうに、世界に於てあることは關心されてあることであるが、關心に於てあるものは求められ却けられ、又肯定され否定される。かくて存在の内最も根本的な存在は關心に於て成り立たねばならぬことゝなる。

吾々は他の言葉で存在の今までの規定を繰り返さう。直接なものは、現象は、即ち存在は、出逢ふことであると言ふことが出来る。それ自體に獨存的に存在してゐながら、偶々主觀の鏡に寫ることによつて吾々に通達出来るやうなそのやうな存在でもなく、主觀の普遍的必然的構成に於て始めて浮び出るやうなそのやうな存在でもなくして、吾々の存在はまづ第一に現象するのであつた。そしてこの現象が出逢ふことである。そして出逢ふことの最も根本的な——根本的の意味は前を見よ——出逢ひ方は世界に於て出逢ふことに外ならない。世界に於て出逢ふとは關心を以て相會することではなければならなかつた。この意味に於て吾々は語ることが出来る、最も根本的な存在は交渉的存在である。

* ハイデッゲル前掲書 321 参照。

**同 S. 52 ff. 参照。

**同 S. 180ff 参照。

世界に於て——交渉的存在に於て——出逢ふと云つたが、何が何に出逢ふのであるか。それは吾々が存在に出逢ふことである。併しこの吾々は形而上學的實體又は認識論的主觀ではなくして又一つの存在である。この存在である吾々が又一つの

存在に出逢ふ。かくしてこそ吾々は存在に通達することが出来、又これであればこそ吾々は存在を問ふ理由と可能と必然を有つのである。存在が存在を理解し得ることがDaseinの向の根本性に外ならない。

現象の存在論的構造を一應かう説明して置いて、吾々は対象方法の關係に歸らう。アリストテレスは方法を次のやうに語つてゐる。研究の途は(方法)は吾々にとつて最も知り易く最も明らかなものから、その本性に於てより明らかなより知り易いものへ行くこと。^{*}方法は吾々から出發する。それはその本性に於てあるものから出發することは出来ない。この意味に於て方法^は吾々^に屬す。吾々はこの途を歩むことによつてその本性に於けるものに通達することが出来る。處が方法によつて通達されるもの、それは吾々の言葉によれば対象であつた。處が又その本性に於けるものとは、とりも直さず存在である。それ故対象は存在にぞくす。かくして今や、対象方法の關係は吾々存在の關係に歸した。處が吾々存在の關係は向の記述に於て交渉的存在であつた。それ故吾々は言はねばならぬ。対象方法の關係は第一に存在——交渉的存在——である。対象方法の關係が何か存在論的な關係であることを私が語つたのは實は之を指したのであつた。第二にこの關係は交渉——交渉的存在

在——である。對象方法の關係を辯證法と呼び、そしてこの辯證法が存在論に地盤を見出すであらうと私の云つたのは之を意味したのであつた。何となれば交渉——吾々が存在に對する——に於てのみ方法と對象との辯證法は意味を有つことが出来るから。

*physica 184 a 16.

第 二 部

方法は無論まづ第一に研究の方法である。吾々が實際上學問研究を實行する時、吾々がその後を追はねばならぬ途が方法である。吾々が交渉に於て出會つた對象は、之を通路として通達される。問はれた對象は答へられる。對象は茲に一つの變化を蒙りながら運動したことを今吾々は注意しなければならぬ。今まで期待されてあつた對象は實現され、今まで彼岸にあつた對象は此岸へ來た。研究の對象は學問の内容となつた。事柄それ自身であつた處の對象は今やその對象に就いての學問となつた。過古の事實としての歴史は史學となる、史學に構成される。この時對象の概念に二つを區別しなければならぬのは必要な穿鑿であるであらう。未

だ構成されなかつた對象が構成された對象となつたのであるから、構成前の對象と構成後の對象とが區別される。實際又人々は規定を異にするこの二つの對象概念を交々用ゐてゐるであらう。「認識の對象と云ふ時、人は前者を考へるが、數學の對象といふ時、人々は恐らく數學といふ學問の内容を考へるであらう。無論吾々は例へば對象と内容との區別を之に當て倣ゆる事は出來ない。この意味での對象自身が構成前とも構成後とも考へられるのであるから。後者の區別は構成前後の夫であつて、超越内在の區別ではない。併しフツサールは却つて次の區別を擧げてゐる。

Gegenstand schlechthin と Gegenstand im Wie seiner Bestimmtheiten* (但しこの區別は二つの別な對象であるのではなくして、同一の概念の二つの異なる規定であるのである。それでは何故吾々は之を別な概念として名づけないのであるか。何故に不便にも對象といふ同じ概念を用ゐねばならぬのか。——同一の對象概念自身が運動するからである)。さてこの對象の二つの區別に應じて、方法はこの時、單に研究、方法——構成前の對象に通達すべき——であるばかりではなく、研究されたる——構成後の——學問の對象のその構成の原理でもなければならぬ。かくて吾々は一見全く異なるやうに見える處の二つの方法概念を得る。「學問研究の方法」と「學問構成の原理」。そ

して實際二つは全く異つた性格を以て吾々に理解されてゐるであらう。一つの實驗を如何に裝置すべきか、或る學術書を如何にして讀むべきか。之は確かに「學問研究の方法」を問ふものとして吾々が語る處である。處が化學は如何なる基礎に基くか、法律學は如何なる根柢の上で成り立つか。之は確かに「學問構成の原理」を問ふものとして吾々が口にする處である。併し事實上、二つは如何に甚だしく異なる間ひであることか。——もし前者に答へたるに後者を以てし、後者に答へるのに前者を以てするならば、吾々は嗤ふべき迂遠かあはれむべき淺薄の非難を受けずにはゐられないであらう。今私は事實上明らかなこの二つのものゝ區別を均らして了はうとするではない。さうではなくして却つて、かゝる區別にも拘らず、同じく方法といふ概念を以て吾々がこの二つのものを理解してゐるその根據をば、方法の有つ存在論的構造に發見するのが目的なのである。方法は今や全く離れたかに見える二つの概念を持つ。研究方法と構成原理。そして前者は構造の上から後者に先立たねばならぬ。かくて後者は前者の研究の方法に對して、學問の方法と呼び做される。この時元來研究の方法であつた方法が、研究といふ性格を振り落して單に學問の方法となつたことは、事實上起こる著しい變化でなくてはならない*。

*Husserl, *Ideou* S. 272 参照。

**二つの區別を最も明かに意識しようと思ふならば、吾々は例へば史學研究法と呼ばれてゐるものと史學認識論と呼ばれてよいものとの一應の對立を憶ひ起こすべきである。例へばベルンハイムとリツケルト。

この對立は次のやうに考へることによつて愈、鋭くなつて來るであらう。研究の概念はその故郷から逐はれ學問が之に代つた。吾々は研究の業績を研究と呼ぶことはある。併しそれは實際に研究する過程の一つの驛舎を實は意味するのであつて、吾々は之によつて驛舎から驛舎に進む研究といふ一つの旅を實は意識してゐるのであらう。研究の概念は研究することの意味するべく動機づけられてゐるやうに見える。之に反して、學問の概念は學問された結果を、學問といふ文化現象を云ひ表はすべく使用されるやうに見える。研究は吾々の云はゞ動作を示す言葉であり、學問は吾々の云はゞ所有を指す言葉である。研究に於て吾々は吾々の關心が求める處の對象に出合ふ。方法對象の交渉が之であつた。そして茲に於ける存在は *Dasein* であつた。之に反して學問にあつては必ずしもさうではない。成程吾々は學問に出會ふ。けれども關心されたもの、求められたものに出會ふのでは必ずしも

ない。吾々は學問を偶、持ち合はせるのであるかも知れない。氣が附いた時にはすでに學問が吾々の手元にあつたのであるかも知れない。それは求められたのではなくして、却つて吾々に押しつけられたものであり、そして吾々が之に全く見向かない場合が少なくないであらう。學問そのものゝ存在は——學問の研究を云ふのではない——直ちには世界に於ける存在ではない。さうではなくして世界の内に内在する存在である。學問の客觀的存在とか社會的公共性とか呼ばれるものが之を意味する場合は少なくないであらう。學問の存在は直ちには *Dasein* ではない。處で研究に學問が代つたのであるから、*Dasein* に *Dasein* ならぬ存在——*Vorhanden-Sein* ともいふべき存在——が代つたのである。處が方法の概念は *Dasein* にぞくしてゐた筈であつた。それ故この概念は本來から云へばもはや學問にはぞくさない筈なのである。もしそれにも拘らず學問に就いても亦方法といふ概念が用ゐられるならば、それは學問から學問の根本をなす研究にまで歸つて、そこから間接にその概念使用の動機が興へられるのである外はない。研究の方法にして對學問の方法とはこのやうな手續きを含む言葉でなければならぬ。この場合の方法概念は其本來の地盤を游離した意味を獲得する。従つて之は前に決定された方法概念に必ずしも

忠實ではあり得ないし、又さうある必要もない。それ故人々は學問の方法の下に例へば學問の基礎一般を理解する傾きを持ち、又學問の基礎に就いての一般的考察が方法論的として形容される理由がある。學問の基礎づけが方法論としての形態を取り、或ひは又それが方法論と名づけられる根據は以上の構造の内にあるであらう。

私はかくて方法の二つの概念の區別と、その區別の必然的構造とを理解した。研究方法与學問構成の原理との區別である。さて併し前者から後者への方法概念の運動は吾々に何を語るのであるか。そこに説かれてあるものは運動による方法概念の衰微である。方法概念は本來の地盤を失ひ唯名的に使用されるに到つたのを吾々は見た。之は方法が對象によつて否定され、概念が方法から對象にまで運動することを意味する。何故なら學問構成といふ方法概念は、構成されたる對象に方法が對應する時始めて産れたのであつたから。始め方法と考へられたものはやがて對象の根本的規定として見出される。方法といふ言葉によつて實はやがて對象の根本規定そのものが理解されることになつて來るであらう。今や對象が方法の名の下に取り扱はれる。——さてこの運動を徹底すれば、方法はもはや研究方法でもなく又學問構成でもなくして、根本的なる對象規定として現はれて來なければならな

い。併し之は表象散漫の結果ではなく却つて概念の必然性に基く。對象方法の根本的構造である交渉的存在に於ける辯證法が茲に其決定的な姿を現はすのに外ならない。併し私は何の目當てもなしに唯疊々として辯證法の連鎖を手繰るのではない。(一)研究方法(二)學問構成(三)對象規定は、學問の方法論的省察の三つの根本形態として吾々に事實上提供されてゐるからである。假に私にその著しい代表者を選ぶことを許すならば第一は形式論理學の所謂方法論又は特殊科學自身の持つ研究方法であり、第二は例へばリツケルトによつて説かれた科學論であり、又第三は例へば物理學の相對性理論の示す處であるであらう。第一は學問が如何にして研究されるかといふ反省であり、第二は學問が如何なる概念構成によつて構成されるかを問ひ、第三は學問の對象なる世界形象が如何なる根底の上に成り立つてゐるかを説明する。三つのものは何れもその問題を異にしてゐるであらう。併し乍ら夫にも拘らず、齊しく方法の省察の名に値ひする充分な理由のあることは、方法概念の運動自身之を説明した處である。そして學問の性格を決定するのにその方法を據り處とする科學論が正しいと考へられる理由は、之によつて必然的である。

方法概念の今のこの運動を導くために、私は対象概念の方法概念への運動を借りた。構成前の対象は構成された対象となると云つた。研究の対象は學問の内容となつた。今この対象概念のこの運動を徹底すれば、——その過程は方法に就いてのアナロギーによつて明らかにされるであらう——、対象は遂には方法の規定となつて現はれなければならぬ。今迄は實踐的に行はれる研究の対象であつた対象が、其本來の地盤を離れて學問内容となり、更に學問の方法的規定に變化するであらう。かくして対象概念は次第に稀薄となり遂に方法概念にまで運動する。この運動の經過する範疇は全く方法の場合に於ける三つの兵站——研究方法學問構成対象規定——に平行することはさうありさうなことである。第一の場合——研究の対象——は、例へば生物學の研究の対象は生物である、といふ意味に於ける対象の觀念によつて代表される。吾々は生物學研究によつて教へられることなくして何を生物として取り扱ふかを大體は知ることが出来るであらう。云ふならば夫は凡そ動物又は植物と呼ばれる一切の生命ある物を含むものと考へられる。生命あるものは何かと尋ねる時、古典的常識は例へば營養を攝取するものと答へるであらう。^{*}

生物學の研究の對象を生物として、又星學研究を對象の天體として、吾々は容易に云ひ解くことが出来る。この容易さはその對象が一つの常識概念として、學問的研究を俟つまでもなく、構成以前に於て存在することを意味するに外ならない。構成以前とは研究以前の、即ち常識的な存在を意味するであらう。尤も人々は常識と學問的研究との間に漸次の移り行きを認めることによつて、この構成の前後が一つの概略的區別に過ぎないと云ふかも知れない。さうすればこの區別は要するに程度の差であつて、云はゞ同じ色の連續スペクトルの任意の二點を偶々私が異なる二つの色として指摘したやうなことになるかも知れない。そしてそのやうな偶然の區別は表象散漫によつて同一とも異なるものとも考へられさうである。——實際又辯證法的段階にあつては吾々はそのやうな不精確さに少なからず出逢ふであらう。併しなから常識から學問的知識への移り行きは決して漸次の概念によつては盡されない。常識はそれ自身の尺度を持ち學問的知識はそれ自身の別の尺度を有つ。恰も輿論がアカデミーの理論とは別な勢力を持つやうに、街頭と研究室とは別な社會的存在として現はれる性質を持つてゐることは事實である。二つのものは全くその原理を——出發を——異にする。一から出發してそのまゝ他へ到着することは出来ない。

吾々は常識から出發し——何となれば如何なる人も *Dasein* としてまづ第一に常識者であるから——、そして若し彼が學者であるならば、一つの轉換によつて學問研究に向はねばならぬであらう。この轉換以後に發生した學問的概念ではなくして、正にそれ以前にすでに吾々が持つてゐた常識概念が研究の對象となるならば、それが構成以前の對象概念なのである。構成の前後は轉換の銳角によつて折目づけられた二つの分野であるであらう。構成以前の對象の概念——研究の對象——は研究すべく與へられたる常識概念に於てその實例を見出すと考へられる。一般に博物學的研究の對象は之ではないであらうか。^{○*}

*アリストテレス (*De Anima* 413 a 30) はさう云つてゐる。

**生物學が物理的化學的精密科學に還元されさうに見えながら、何故還元され得ないかに就いて、その存在論的根柢はかく説明されることが出來ると思ふ。Vitalismus の成否は實證家によつて決定されるべきであるが、少くともこの思想が何故發生しなければならぬかといふ必然性は茲に理解される。

第二は構成以後の對象概念の場合である。對象はもはや研究の對象ではなくして、研究されたる——學問の——内容となる。吾々は例へば物理學に於てその代表者

を見出すであらう。生物學の對象が生物であつたに對して物理學の對象は何であるであらうか。それは天體でも地球でもない。そこに有るものは天體の物理學、地球の物理學に過ぎない。物理學の對象は特定の之又は彼といふ具體的な常識概念ではなくして、より一般的な抽象的概念でなければならぬ。吾々は夫を物體とすら云ふことは出來ない。却つて物體に於て第一義的に本來屬する處の或るものではない。物體の運動或ひは靜止の或る原理或る原因と云はれる處の、自然 *things* とも云ふべきものと考へる外はないであらう。^{*}この意味に於て物理學の對象は言葉通りに物理である。それは對象と呼ばれるよりも寧ろキルヒホッフの言葉に従つて現象と呼ばれて好いやうな規定を持つ或るものである。(人々は物理現象といふ言葉は好むであらう。併し誰も動物現象とは云はないに違ひない)それは學問的に構成される以前は、或るものと呼ぶ外は實は呼びやうのない或るものである。その意味に於て之は到底第一の場合の常識概念ではない。物理學の内容にまで構成されて始めて、自然とも物理現象とも名づけられることが出來、又その名が何を指し示すかを吾々が眞に覺ることが出來るやうな、そのやうなものが物理學の對象なのである。之は物理學の内容として物理學的方法によつて規定された對象

であり、決して其儘吾々が常識的に出逢ふ對象ではないからこそ、却つて吾々は任意の常識概念の或る一面をとり出して常に之を物理學の對象とすることが出来る譯である。かくして同一の常識概念は例へば生物學の對象とも考へられると同時に又物理學の夫れども考へられる理由が出て來るのである。其故は後者が構成された對象であり、又その意味に於て抽象の産物であり、一般的であるからに外ならない。物理學が何故自然科学の根柢となることが出來、又何故自然科学の理想的典型として王位に就けられるのを慣はしとするかは、之によつて半ば必然的である。^{*}第二の場合の——學問内容としての——對象概念は、物理學に於てその一つの實例を見出すと云ふことが出来る。

*アリストテレス。Physica 192b 21-23參照。

**第二の場合に屬する科學は無論物理學だけではない。それにも拘らず物理學だけがこの名譽を擔ふ。その必然性は自然概念の解釋を之に加へることによつて完全に與へられるであらう。今の場合だけではこの必然性は半ばを出ない。

對象が方法の規定となつて現はれる第三の場合は、再び相對性理論によつて與へ

られると思はれる。物理学は坐標を現象記載の手段として用ゐる。一切の自然現象は數量として計量され、數量は空間量として測定され、そして空間量は坐標に於て觀測される。坐標は物理学一般にとつて窺局の手段である。そしてかゝる窺局の手段は或る意味に於て方法でなければならぬ。何となれば物理学は之によつて始めて學問として構成されるのであり、この學問構成こそは方法を取り扱つた第二の場合に相當する學問の方法に外ならないからである。處が相對性理論に従へば、かゝる坐標系はそれ自身一つの世界を組み立てるのであつて、その坐標系の軸の變換乃至は曲率の變更、又は測度の置換は、種々なるポテンシャルとして解釋されるものと説かれる。そして恰も重力電磁氣ポテンシャルこそ物理学の對象でなければならぬ。それ故茲に於ける坐標空間はもはや方法ではなくして對象でなければならぬ。それ故茲に見えるであらう。併し物理的空間はあくまで方法であることを已めることが出來ない。もしさうでなければ物理学者は測定や觀測の地盤を有たない處の、通路なき空間の一つの形而上學的變態に面接しなければならなくなるであらうから。物理的空間は元來方法概念として成り立つたものに外ならない。而もそれに於て對象概念が発見されるのである。かくてこの場合に於て對象と考へら

れたものは實は方法の規定に外ならないことが約束されてゐる。對象は研究の對象としての地盤を離れて運動し却つて方法に於て自己を見出す。始め物理的構成を經ない間に物理學的研究の對象と見えた自然の空間的存在は、物理學的構成の極點に於て、方法としての空間——坐標——として現はれたであらう。この方法がなほ矢張對象の名に値ひする理由をば私は今説明した處である。

方法概念の運動に平行して對象概念の運動を跡づけることが出来ることはかくして——尤も私は簡單に書くためにアナロジーに頼つたのであるが、——存在論的に理解される筈である。學問の性格をその對象に於て見出し、従つて之に依つて例へば學問の分類を企てることが、如何に必然的であるかは又、今まで述べて來た處から明らかであるに違ひない。

方法は對象を決定し同じく對象は又方法を決定した。そして方法概念は對象概念にまで運動し、同じく對象概念は方法概念にまで運動した。方法對象の構造に於て、たとひ兩者が同一の役割を演じないまでも、少くとも兩者は同じ程度の資格を有

つてゐなければならぬやうに見えた筈である。今もし學問といふものがこの方法對象の構造に於て明かにされるものであるとするならば——多分人々はこれに反對はしないであらう——學問の構造に於て方法と對象とは同じ程度の權利に與らなければならぬやうに見える筈である。實際吾々が既に見た通り、學問は方法によつてその性格を理解されると考へられると共に、又同じく對象によつてもその性格を理解され得るものと考へられる。前者は科學方法論の名の下に、後者は科學の分類の名の下に、それらの必然性を有つた。處がそれにも拘らず人々は學問を性格づけるのに、對象に依つてするよりも方法によつてする方を學問の性格それ自身に、より適はしいと思ふに違ひない。それは何故であるのか。私は最後にその必然性を理解してをく義務がある。

人々は直ちに云ふであらう。吾々はすでに方法が吾々の側にぞくすのを見た。そして學問も亦吾々の産んだ仕事である。故にこの吾々といふ概念を媒介とするならば、學問に固有な契機は對象ではなく明らかに方法である外はない。其は至極當然ではないかと。けれども人々はかく主張することによつて一つの同語反覆をなして居るに過ぎない。學問はどのやうな意味に於て吾々の産んだ仕事であるの

か。それは吾々が方法によつて學問を構成すると考へられるからである。この場合それ故學問は方法と同一視されてゐる。方法の性格は無論方法である。又或人々は學問と眞理とを等値する事によつて次のやうに云ふかも知れない。眞理は吾々が構成したものである、それ故この吾々を媒介として學問は獨特の仕方方法にで結び付く筈ではないかと。學問が眞理と等値されるといふ言葉自身を吾々は承認してよいであらう。學問は眞理の體系と考へられるであらうから。けれども眞理が吾々によつて構成されたものであるとは何を意味するか。恐らくこの構成の原理は普遍妥當性を意味するであらう。即ち、先天的綜合判斷の可能性がそれであるであらう。もしさうであるとすれば、主觀によつて綜合された判斷が如何にして客觀性を有つことが出来るか、といふ問ひをこれは意味する。この時所謂吾々は主觀に外ならない。處が方法が吾々にぞくすと云つた場合の吾々が決して主觀であつてはならないことを私は特に指摘してをいた。従つて人々の推論は四個の名辭によらねばならなくなる。のみならず普遍妥當性が獨立化せられて規範となり、規範概念が thematisch に獨立化して價值概念となる時、それは主觀とさへ絶縁した客觀となつてしまふであらう。かくて人々は見せかけの媒語をすら失ふ。それであるか

ら學問に於て特に方法が重大に見える理由は、學問が吾々にぞくすからではない。さうではなくし已に方法が對象に對して何かの優越を示し得るからであるに違ひない。處が方法と對象とは今まで述べた限りに於ては平等であるやうに見えた。この撞着をどう解くか。

對象方法の關係は交渉的存在にあつた。兩者は従つて共に存在である。處が方法は特有な存在——吾々——にぞくした。もし方法が對象に對する優越があるとすればそれはたゞこの點にのみあることが出来るに相違ない。そこで人々は云ふであらう。自我は存在の根柢である、それ故自我にぞくす方法は當然非我にぞくす對象を優越すると。けれどもこのやうな形而上學的存在が吾々ではなかつた筈である。自我が非我に對すると同じに吾々は存在に對するかも知れない。けれども吾々が存在の根柢であるのではなかつた。併しながら何故人々は自我を存在の根柢と考へたのであるか。自我が一つの實踐概念であるからである。(吾々はフイヒテを思ひ起こせばよい)そしてこの點に於て吾々といふ概念も自我と同じ使命を帯びて要求された概念でなければならぬ。何となれば吾々と存在との交渉は又一つの實踐概念に外ならないから。かくて交渉的存在のこの實踐性を代表するもの

は吾々である。言葉を換えて云ふならば、対象方法の關係を代表するものは方法でなければならぬ。方法の優位はその實踐的優越にあることとなる。疑問はかくして解かれた。理論的には方法も対象と平等である併し實踐的には方法が代表的な位置を占める。學問が何故方法によつて性格づけられねばならぬと考へられるかは、學問の實踐的成立——研究——にまで遡る時始めてその必然性を享ける。

さてこの平凡な結論は一つの説明を含んでゐる。方法の問ひは、即ち一般に方法論は、實踐的動機に於てのみその必然性を有つことが出来る、といふ事が今や明らかとなつたであらう。といふのは實踐的學問態度——研究——によつて動機づけられるのでなければ、方法の問題は決して本來の問題として發生して來る理由がないといふことである。吾々は方法論を如何なる動機に従つても追求することは出来るであらう。單に話題として掲げられたものとして之を考察することも出来るし、或ひは學問の研究に全く無關心でありながらもその學問の方法論を思辨することも出来る。吾々は或る學問を研究する代りに其學問の諸々の方法の說を比較し按配することも出来るであらう。處がこの種類の所謂方法論が如何に不毛であり無力であるかを人々は知つてゐる。併しそれは何故であるのか。吾々の結論は之を説

明する。方法の問は學問實踐からのみ發生する。従つてその發生の地盤である實踐を遊離した處の方法論は、實は方法を發見しやうとする誠意を缺いた一つの閑話である外はない。この種類の營みは方法なき研究がさうあると同じ程度に、浪費の危険性に曝されるであらう。方法の問題は實踐的課題である。方法對象の關係が方法對象の對立の單なる綜合といふやうな視角に於て見ることが許されず、特に在論的構造から基づけられなければならなかつた所以が之である。そして生活に於て方法が根柢に働いてゐると云つた私の最初の言葉は之に基いて理解されるであらう。

方法概念の分析は、今や、理論的説明から、實踐的説明に移る。